

【 第 140 聖詠 第 4 調 】

しゅよ なんぢに よぶ すみやかに われに いたり た給  
主 爾 呼 速 我 格 給  
ま え 、 しゅよ われに ききた ま え 、 しゅ  
主  
よ なんぢに よぶ すみやかに われに いたり た ま  
え 、 なんぢに よぶ と き わが いのり の こえを い  
爾 呼 時 我 禱 聲 納  
れ た ま あ え 、 しゅよ われに ききた ま  
給 主 我 聽 給  
あ え 、 ね が わ く は わが いのり は こうろ の  
願 我 禱 香 爐  
か お り の ご と く 、 なんぢが かんばせ の ま え に  
香 如 爾 顔 前  
の ぼ り 、 わ が て を あ ぐ る は く れ の ま つ  
登 我 手 擧 暮 祭  
り の ご と く い れ ら れ ん。 しゅよ われに ききた 給  
如 納 主 我 聽 給  
ま あ え 。

誦經) しゅ わ くち まもり お お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば  
主よ、我が口に 衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に 邪なる言

かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら  
に傾きて、不法を行 う人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の

あまみ な ぎじん われ ばつ こ きょうじゆつ われ せ こ い  
甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と

うるわ あぶら わ こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき  
美しき膏、我が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の惡事に敵す。

かれら しゅちやう いわお あいだ きん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き  
彼等の首長は巖石の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り

くだ わ ほね ちごく くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ  
砕き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾

たの わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも  
を恃む、我が靈を退くる母れ。我が爲に設けられし弼、不法者の網より我を護

たま ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え  
り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

### 【 第 1 4 1 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち  
を其前に顯せり。我が靈の表に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと  
に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認む

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ  
る者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて

い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま  
云えり、爾は私の避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給

われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ  
え、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強けれ

ばなり。

しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと  
⑥主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人

なんぢ まえ つつし ため  
の爾の前に敬まん爲なり。

いま よ い とき いま すくい ひ ひとりじんあい しゅ なんぢ おお じんじ もつ  
今は嘉く納るべき時、今は救の日なり、獨仁愛なる主よ、爾の多くの仁慈を以

わ たましい のぞ わ ふほう おもに おろ たま  
て吾が靈に臨みて、我が不法の重任を卸し給え。

われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの  
⑤我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

いま よ い とき いま すくい ひ ひとりじんあい しゅ なんぢ おお じんじ もつ  
今は嘉く納るべき時、今は救の日なり、獨仁愛なる主よ、爾の多くの仁慈を以

わ たましい のぞ わ ふほう おもに おろ たま  
て吾が靈に臨みて、我が不法の重任を卸し給え。

わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ  
④我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

ちめいしゃ がいせん おおい かな かれら いさ くるしみ う おのれ ち ながれ あく  
致命者の凱旋は大なる哉、彼等は勇ましく苦を受けて、己の血の流にて悪

き たいすう おぼ もろもろ けがら まつり とど ぐうぞう まよい やぶ いま われら  
鬼の大数を溺らし、諸の汚わしき祭を止め、偶像の迷を破れり。今は我等の

たましい へいあん おおい あわれみ たま いの たま  
靈に平安と大なる憐とを賜わんことをハリストスに祈り給う。

ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ  
③願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、

かれ そのことごと ふほう あがな  
彼はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

しゅ しゅうせいじんおよ しょうしんぢよ きとう よ なんぢ へいあん われら あた われら  
主よ、衆聖人及び生神女の祈禱に因りて、爾の平安を我等に與え、我等を

あわれ たま なんぢひとりこうおん しゅ  
憐み給え、爾獨洪恩の主なればなり。

ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ  
②萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

せい もの さいばん お なんぢら うけとめ あくま ちから はづかし ひとびと まよい と  
聖なる者よ、裁判に於ける爾等の承認は悪魔の力を辱め、人人を迷より解

きたり。故に爾等は首の斬らるる時呼べり、人を愛する主よ、願わくは我が靈の

まつり なんぢ まえ よ い われらなんぢ あい ざんじ いのち かえり  
祭は爾の前に嘉く納れられんことを、我等爾を愛して、暫時の生命を顧みざればなり。

けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが そん  
①蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

ああせい もの なんぢら ぼうえき ぜん かな けだしち あた てん もの つ ざんじ  
嗚呼聖なる者よ、爾等の貿易は善なる哉、蓋血を與えて、天の者を嗣ぎ、暫時

くる えいえん よろこ じつ なんぢら ぼうえき ぜん きゅうかい もの す ふきゅう  
苦しみて、永遠に歡ぶ。實に爾等の貿易は善なり、朽壞の者を棄てて、不朽

もの う いましよてんし とも いわ た いつたい せいさんしゃ うた  
の者を受けたればなり。今諸天使と偕に祝いて、絶えず一體の聖三者を歌う。

【 生神女讚詞 第1調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
光榮父子聖神歸今

いつもよよにい、アミン。  
何時世世にい、アミン。

ひと おより うまれて しゅさいを うみ し  
 人 生 主宰 生

ぜんせかいの こうえいとてんのもんなる どうていぢょ  
 全世界 光 榮 天 門 童 貞 女

マリィヤ、しよて えんしのうた、しよ  
 諸天 使 歌 諸

しんじやのかざりなるものをほめうたうべえ  
 信者 飾 者 讚 歌

し。か あれはてんとひとしく、かみの  
 彼 天 均 神

みやとひとしきものとしてあらわれたあ  
 宮 均 者 顯

り、か あれはあだのへだてをやぶりて  
 彼 仇 隔 破

わぼくをむすび、くにをひらけえ  
 和睦 締 國 開

り。われら はかれをしんのかためとな爲  
 我 等 彼 信 固 爲

し、かれより うまれししゅをふせぎまもるも者  
 彼 生 主 扞 衛 者

のとな爲あす。いさめよお、かみの  
 爲 勇 神

たみよ、いさめよ、しゅはてきにかたん、  
 民 勇 主 敵 勝

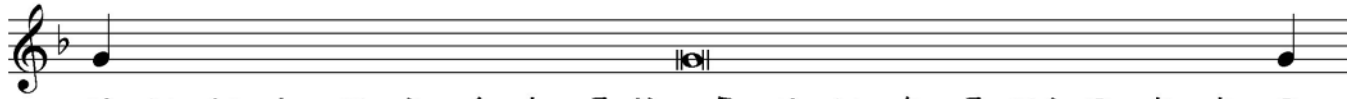


ぜんの うしやな れば な あ り  
全 能 者

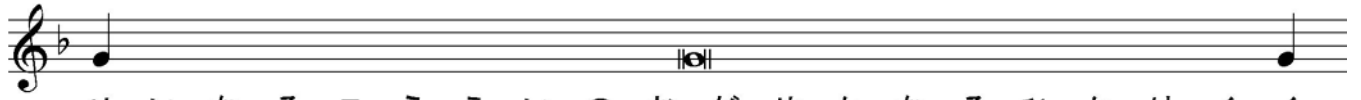
【 聖入 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、

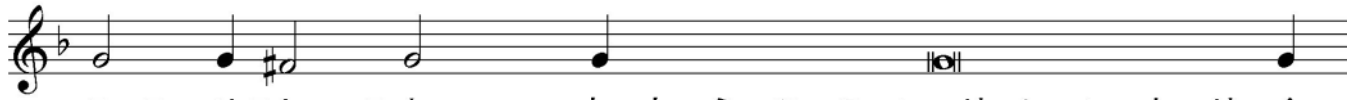
【 聖ソフロニイの祝文 】



せ い に し て ふ く た る じょう せ い な る てん の ち ち の  
聖 福 常 生 天 父



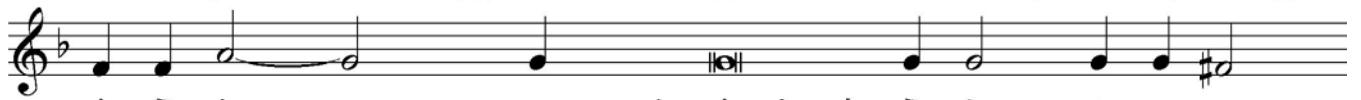
せ い な る こう え い の お だ や か な る ひ か り イ イ  
聖 光 榮 穩 光



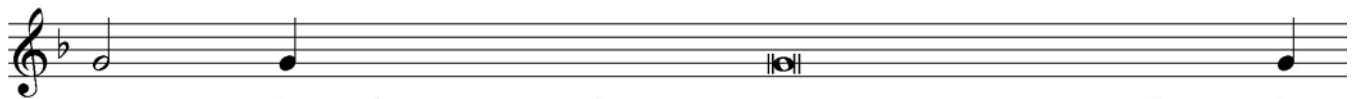
ス スハリスト スよ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く  
我 等 日 入 至 暮



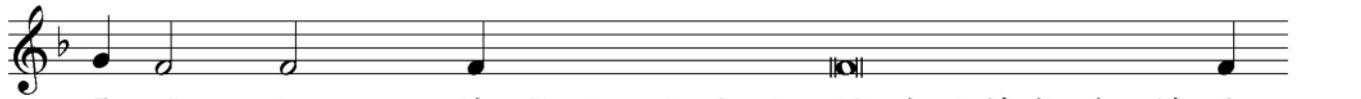
れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん  
光 見 神 父 子 聖 神



を う と お う 。 い の ち を た も う か み の こ  
歌 生 命 賜 神 子



よ 、 なんぢ は い つ も け い けん の こ え に て う た わ  
爾 何 時 敬 虔 聲 歌



る べ し 、 ゆ え に せ か い は なんぢ を あ が め  
故 世 界 爾 崇



ほ む 。

【 第一の <sup>プロキメン</sup> 提綱 】

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし、<sup>しゅうじん</sup> 衆 <sup>へいあん</sup> 人に平安、<sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし。

誦經) プロキメン、<sup>だいし しらべ</sup>第四の調、<sup>ねが</sup>願わくは<sup>なんぢ じれん なんぢ しんじつ</sup>爾の慈憐と<sup>つね われ</sup>爾の眞實とは常に我を護らん、



ねがわくはなんぢのじれんとなんぢのしんじつと  
願 爾 慈憐 爾 眞 實  
は つねにわれをまあもらん。  
常 我 護

誦經) <sup>われせつ しゅ たの</sup>我切に主を恃みしに、<sup>かれわれ かたぶ たま</sup>彼我に傾き給えり、



ねがわくはなんぢのじれんとなんぢのしんじつと  
願 爾 慈憐 爾 眞 實  
は つねにわれをまあもらん。  
常 我 護

誦經) <sup>ねが なんぢ じれん なんぢ しんじつ</sup>願わくは爾の慈憐と爾の眞實とは、



つねにわれをまあもらん。  
常 我 護

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>そうせいき よみ</sup>創世記の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup>謹みて聽くべし、

【 創世記 5章30節～6章8節 】

誦經) <sup>としごひやく</sup>ノイは年五百にして<sup>さんし う</sup>三子を生めり、<sup>これ</sup>シム、<sup>ひとはじ</sup>ハム、<sup>ちじょう</sup>イアフエト是なり。人始めて地上

<sup>はんしよく</sup>に繁殖して、<sup>ぢよし かれら うま</sup>女子も彼等に生れたれば、<sup>かみ しょし ひと ぢよし うるわ</sup>神の諸子は人の女子の美しきを見て、<sup>み その</sup>其

<sup>およ える</sup>凡そ選べる者を妻と爲せり。<sup>しゅかみい</sup>主神曰えり、<sup>わ しん なが</sup>我が神は永く此の人人の中に居らざら

<sup>かれらにく</sup>ん、<sup>ただかれら ひ ひやくにじゅうねん</sup>彼等肉なればなり、<sup>かのときち いじょうふ</sup>惟彼等の日は百二十年なるべし。當時地に偉丈夫あ

<sup>そののちかみ しょし ひと ぢよし い</sup>りき、<sup>こ う</sup>其後神の諸子は人の女子に入りて子を生みしが、<sup>これら またいじょうふ</sup>此等も亦偉丈夫にして、



いにしえ <sup>な</sup> <sup>ひと</sup> <sup>しゅかみ</sup> <sup>ひと</sup> <sup>あく</sup> <sup>ち</sup> <sup>み</sup> <sup>かくじん</sup> <sup>ひび</sup> <sup>その</sup> <sup>この</sup> <sup>ただ</sup> <sup>あ</sup>  
古昔の名聲ある人なりき。主神は、人の悪の地に盈ち、各人日々に其心に惟慝し

きことを <sup>はか</sup> <sup>み</sup> <sup>ここ</sup> <sup>おい</sup> <sup>かみ</sup> <sup>ちじょう</sup> <sup>ひと</sup> <sup>つく</sup> <sup>く</sup> <sup>その</sup> <sup>この</sup> <sup>うれ</sup>  
きことを圖るを見たり、是に於て神は地上に人を造りしことを悔いて、其心に憂

いたり。 <sup>かみい</sup> <sup>わ</sup> <sup>つく</sup> <sup>ひと</sup> <sup>われ</sup> <sup>ち</sup> <sup>おもて</sup> <sup>ほろぼ</sup> <sup>ひと</sup> <sup>かちく</sup> <sup>はうもの</sup> <sup>そら</sup>  
いたり。神曰えり、我が造りし人を我地の面より滅し、人より家畜、昆蟲、天空

の鳥に <sup>とり</sup> <sup>およ</sup> <sup>われ</sup> <sup>かれら</sup> <sup>つく</sup> <sup>く</sup> <sup>ただ</sup> <sup>しゅかみ</sup> <sup>まえ</sup> <sup>めぐみ</sup> <sup>え</sup>  
の鳥に及ばん、我彼等を造りしことを悔ゆればなり。惟ノイは主神の前に恩を獲  
たり。

【 第二の提綱 <sup>プロキメン</sup> 】

司祭) <sup>つつし</sup> <sup>き</sup>  
謹みて聴くべし、

誦經) <sup>だいらく</sup> <sup>しらべ</sup> <sup>われい</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>われ</sup> <sup>あわれ</sup> <sup>わ</sup> <sup>たましい</sup> <sup>いや</sup> <sup>たま</sup>  
プロキメン、第六の調、我言えり、主よ、我を憐み、我が靈を愈し給え、

われい えり、しゅよ、われを あわれ み、わ  
我 言 主 我 憐 我  
が た ま し い を い や し た ま え 。  
靈 愈 給

誦經) <sup>まづ</sup> <sup>もの</sup> <sup>とほ</sup> <sup>もの</sup> <sup>かえり</sup> <sup>ひと</sup> <sup>さいわい</sup>  
貧しき者 乏しき者を顧みる人は福なり、

われい えり、しゅよ、われを あわれ み、わ  
我 言 主 我 憐 我  
が た ま し い を い や し た ま え 。  
靈 愈 給

誦經) <sup>われい</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>われ</sup> <sup>あわれ</sup>  
我言えり、主よ、我を憐み、

わ が た ま し い を い や し た ま え 。  
我 靈 愈 給

【 祝福 】

司祭) <sup>えいち</sup> <sup>つつし</sup> <sup>た</sup> <sup>ひかり</sup> <sup>しゅうじん</sup> <sup>てら</sup>  
睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

誦經) <sup>しんげん よみ</sup>箴言の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup>謹みて聽くべし、

【 箴言 6章20～7章1節 】

誦經) <sup>わ こ なんぢ ちち ほう まも なんぢ はは いましめ す なか つね これ なんぢ</sup>我が子よ、爾の父の法を守れ、爾の母の誠を棄つる母れ、常に之を爾の  
<sup>こころ むす これ なんぢ くび お これ なんぢ ゆ とき なんぢ みちび い とき</sup>心に結び、之を爾の項に佩びよ、是は爾の行く時に爾を導き、寐ぬる時に  
<sup>なんぢ まも き とき なんぢ かた けだしいましめ ともしび おきて ひかり おしえ</sup>爾を守り、寤むる時に爾と語らん。蓋誠は燈なり、法は光なり、教訓  
<sup>せめ いのち みち なんぢ あ おんな いんぶ した へつらい まも いた なんぢ</sup>の譴は生命の途なり、爾を悪しき婦より、淫婦の舌の諂媚より守るを致す。爾  
<sup>こころ うち かれ うるわしき した なか なんぢ め よ とら なか かれ そのまぶた</sup>は心の中に彼の美を戀う母れ、爾の目に因りて捕わるる母れ、彼は其瞼  
<sup>もつ なんぢ いざな けだしいんぶ ため ひと わづか パン ひとかけ いた</sup>を以て爾を誘うべからず、蓋淫婦の爲に人は僅に餅の一角あるのみに至る、  
<sup>かんぶ ひと たつと たましい とら ひとひ ふところ お そのころも や ひと</sup>姦婦は人の貴き靈を捕う。人火を懷に置きて、其衣を焚かれざらんや、人  
<sup>やけずみ ふ そのあし や ひとそのとなり つま つ またか ごと これ</sup>藪炭を踏みて、其足を焚かれざらんや、人其鄰の妻に就くも亦是くの如し、之に  
<sup>さわ もの つみ ぬす ものう そのたましい あ ため ぬす ひとこれ ゆる</sup>捫る者は罪なしとせず。竊む者飢えて其靈を飽かせん爲に竊まば、人之を容さ  
<sup>ず も とら そのしちばい つぐの そのいえ しょゆう ことごと いた おんな かんいん</sup>ず、若し執えられば、其七倍を償い、其家の所有を悉く出さん。婦と姦淫  
<sup>おこな もの こ むち これ な もの おのれ たましい ほろぼ かれきず はづかしめ</sup>を行う者は、是れ無知なり、之を爲す者は己の靈を滅す。彼傷と辱と  
<sup>う そのはぢ つい そそ けだしねたみ おつと いか むく ひ かれゆる</sup>を受けん、其耻は終に雪がれざらん、蓋妒忌は夫を怒らしむ、報ゆる日には彼寛  
<sup>いか あがない かえり おお おくりもの な やわ わ こ</sup>さず、如何なる贖をも顧みず、多くの贈遺を爲すとも柔らがざらん。我が子よ、  
<sup>わ ことば まも わ いましめ なんぢ こころ おさ わ こ しゅ とうと しか けん</sup>我が言を守れ、我が誠を爾の心に藏めよ。我が子よ、主を尊め、然らば堅  
<sup>ご かね ほか た もの おそ なか</sup>固にならん、彼の外に他の者を畏るる母れ。

※ 願わくは我が禱は、、、へ